

近代資本主義の成立と 奴隷貿易

課題のありか

カトリック教会は双方に深くかかわって来たのではないのか

西山俊彦
Toshihiko Nishiyama

2003年10月
カトリック社会問題研究所
『福音と社会』
第42巻第5号

新大陸発見五百周年は 人類の輝かしい歴史だが

見る目を持っている者は幸せ

C・コロンブスによる新大陸の発見（1492年10月12日）は「天地創造につぐ偉業」と称えられました。それからほぼ500年、新大陸発見500周年を前に、教皇ヨハネ・パウロ二世は

「新大陸の発見、征服、キリスト教化は、暗影もなくはなかったとはいえ、全体としてみれば輝かしい位置を占めている」(1990年5月5日、メキシコ・ベラクルスにて)

と評されました。たしかにキリスト教化は絶大で、今では、カトリック信者の二人に一人が“新大陸”住んでいます。

資本主義の隆盛も同様です。黒人奴隷を動力源とするプランテーション（大規模農園）生産によって資本を蓄積、資本主義を確立して、それが目下グローバル覇権を達成しているのも、快挙に違いありません。

ところが「全体としてみる」評価では、十羽一絡げの論法では、「強者の立場」「勝利者の立場」だけが代表されないとも限りません。是非善悪は、必ず、その立場を明示して言えること、ですから、元ブリティッシュ・コロンビア州最高裁判事T・バージャーは明言します

「(教皇ヨハネ・パウロ二世の評価は)歴史を軽視するのでなければ決して到達できない判断である」(1992)と。

これに代えて、もし、

「人びとの喜びと希望、悲しみと苦しみ、とりわけ、貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子達の喜びと希望、悲しみと苦しみである」
(『現代世界憲章』)

のなら、インディオ住民の奴隷化と絶滅、黒人奴隷の世紀にわたる売買、移送、使役など、人格無視の無数の虐待、これらは、決して、「全体の中に」埋没隠蔽できるものではありません。

特にそれらが「見捨てられた大陸」の苛酷な現状の原因なら、「過去の惨事」としてだけでなく「現在の惨事」に属します。

とにかく「人類最大最長期にわたるホロコースト(大量虐殺)」である奴隷貿易を、資本主義繁栄の彼方に葬り去ってしまうなら、人類は理性のカケラも持ち合わせず、キリスト者はその名の逆の存在となります。その名に値する者、兄弟の重荷を共に担う者となるかならないかは、「見ることができる心の目」(マタイ13・16)を持っているかないかの問題です。



「奴隷の家」壁画の説明に「アフリカが開発の遅れをとったのは奴隷制度のためである」とある

犠牲者は 600 万人か、6000 万人か

それではいったい、どれほどのアフリカ人が奴隷として大西洋を横断させられたのでしょうか。600 万人とも 6000 万人とも言われていますが、記録も統計もないのですから、確かなところは判りません。おおよそ、1200 万から 1500 万人と推定され、当らずとも遠からずと見なされています。

F・タンネンバウム（1946）によれば、全体の 3 分の 1 が郷里から出航地に着くまでに、3 分の 1 が大西洋横断途中で亡くなり、残りの 3 分の 1 だけが植民地での強制労働に従事しました。しかし今では、大西洋横断途中での犠牲者を 10～15% と見なす見方が大半です。もちろん横断前後の犠牲者はこれをはるかに上回ります。新大陸に辿り着けた者も着けなかった者も、どちらも犠牲者とすれば、奴隷貿易は人類最大最悪の犯罪であって、S・エルキンズ（1959）らが、ナチスによるホロコーストと対比させ、これをはるかに上回る犯罪と位置づけているのも当然です。



“不帰の旅”に向け最後の港となったゴレ島

奴隷労働が近代資本主義を準備

詳しくは追って記述しますが、近代資本主義の成立に奴隷労働が決定的役割を果たしたことは「ヨーロッパ全体が一致する見解」(E・ウィリアムズ、1970)です。“発見”直後は、農・鉱業奴隷としてインディオを使役しました。しかし彼らがほぼ絶滅してからは、まずブラジルと西インド諸島での砂糖黍プランテーションに、そして、北米を加えた珈琲、煙草、ゴム、特に綿花のプランテーションに黒人奴隷を導入しました。

奴隷労働にまさる搾取はないのですから、「黒ん坊一人は白人労働者三人より働きがよく、かつ安かった」(岡倉登志、2001)のは当然です。とにかく、アフリカで黒人を買収し、アメリカで大量生産した原料をヨーロッパで製品化して各地に売り捌く、この三大陸を結ぶ交易の環を「三角貿易」と言いました。産業革命までの期間を、徐々に資本を増殖して革命を準備した「先行条件期」とか「資本(原資)の本源的蓄積期」と言いますが、そこでの生産性の基軸となったのが、もちろん、奴隷労働に他なりません。

とかく動力革命とエネルギー革命が産業革命を可能にしたと直結されますが、一層決定的だったのが、それに先立つ「原資蓄積期」とその間の奴隷労働の役割です。

とすれば、近代資本主義の成立と奴隷貿易・労働は表裏一体だったことになり、黒人奴隷の幾世紀にもわたる徹底搾取を主軸として、“ヨーロッパ・北米工業諸国の先進性”と“アジア・アフリカ途上諸国の後進性”とは一体不可分離の関係にあったことが判ります。⁽¹⁾

奴隷制は「人道に対する犯罪」

「ダーバン会議」の「宣言」等

近代資本主義は、前項に指摘したとおり、人間性の高揚とその蔑視、繁栄と衰退、文明と非文明を表裏一体として形成されました。しかし長年、虚偽意識（錯覚）の作用によって、意識に上ったのは前者、即ち、「勝者の意識」のみでした。ところが、グローバル化の波は、後者も前者と一体であることを理解させる視野枠組を提供することになりました。その一つが、「人種主義、人種差別、外国人排斥および関連のある不寛容に反対する（国連）世界会議 「ダーバン会議」と略」（2001年8月31日 - 9月8日、南アフリカ・ダーバン市にて開催）です。

「ダーバン会議」の主題の一つは、奴隷貿易への認識を喚起し、現代の諸矛盾に連なる歴史的責任を迫ることでした。「宣言」の一つは次のとおりです

「大西洋越え奴隷取引などの奴隷制度と奴隷取引は、その耐え難い野蛮さのゆえだけではなく、その大きさ、組織された性質、とりわけ被害者の本質の否定ゆえに、人類史のすさまじい悲劇であった。奴隷性と奴隷取引は人道に対する罪（傍線筆者、以下同じ）であり、とりわけ大西洋越え奴隷取引は人道に対する罪であったし、人種主義、人種差別、外国人排斥および関連のある不寛容の主要な源泉である...。」(13)

この「宣言」の最大の特徴は、奴隷貿易等が「人道に対する犯罪」であることを明瞭に断言したことです。

これを一層展開したのが、ほぼ同時進行のかたちで開催された「NGO フォーラム」の「宣言」です

「人道に対する罪を構成する大西洋越え奴隷貿易と奴隷制は、非人間的な移転と歴史的に最大規模の強制移住（一億人を越える）を強要し、何百万人ものアフリカ人を死に至らしめ、アフリカの諸文明を破壊し、アフリカ経済を衰退させ、今日まで続くアフリカの低開発と周辺化を築いたことを、認識する。アフリカがヨーロッパ列強によって解体、分割され、それによって、西洋の経済と産業の利益を目的にアフリカの天然資源を継続的に搾取するため、西洋の独占支配が築かれたことを認める。」(66)

これを受けて、同じく「NGO フォーラム」の「行動計画は、責任に応じた（賠償）補償、を次のように、求めます

「大西洋越え奴隷貿易... 奴隷制およびアフリカの植民地化に関与し、そこから利益を得た米国、カナダ、ヨーロッパ諸国、アラブ諸国は、世界会議から一年以内に、これらの人道に対する罪の犠牲者のために、国際的な補償機構を設置することを、要求する。」(236)

「人道に対する罪」とは

これはロンドン協定（1945年8月8日）によって国際軍事裁判所憲章として設定され、枢軸国の戦争指導者を裁いた「東京裁判」と「ニュルンベルグ裁判」で適用されたもの⁽²⁾で、次のように説明されます

「犯罪地の国内法に違反すると否とを問わず、...戦前もしくは戦争中に行われた、すべての民間人に対する殺人、絶滅、奴隷化、強制連行及びその他の非人道的行為、または政治的、人種的、ないし宗教的理由に基づく迫害行為」

この罪状の最大の特徴は、同じく、「占領地の民間人の殺害、虐待、奴隷労働、等であっても、戦争の法規または慣例の違反」に当たる「戦争犯罪」とは異なるものであることで、実際には、ユダヤ人の大量殺戮^{ホロココースト}やアジア占領地区での民間人の虐殺などに適用されました。

「人道に対する罪」には時効がない

なぜ「人道に対する罪」と宣言することに意義があるかと言えば、1968年の国連総会決議 2391号以降、「人道に対する罪には時効がない」ことが確立されているからです。これによって「事後法非遡及の法理」は撤廃され、時効に関係なくユダヤ人虐殺関係者が糾弾されることになりました。もちろん、奴隷貿易、奴隷労働が「人道に対する罪」に当たるなら、これもまた、時効に関係なく糾弾できるのは言うまでもありません、

米国等の退場と9・11への予感

「奴隷貿易が人道に対する罪である」こと、「植民地主義による略奪が多くの国を衰退させた」こと、「被害者の尊厳回復のために、金銭補償ではないが、謝罪が必要である」ことが合意されたことは画期的なことでした。

しかし「米国は『この会議はパレスチナ人によってハイジャックされた会議だ』という理由でイスラエルとともに退場しました⁽³⁾。

『9・11同時多発テロ』が発生したのはその3日目のことでした。⁽⁴⁾



質素な壁に「奴隷の家」を訪れた妻人たちの写真が（ゴレ島で）。中央に「この家は叫びを上げている。この世紀を越え、世代を越える黒人奴隷の叫びを聴くために私は来た。ヨハネ・パウロ2世」とある。

教会は奴隷貿易に断固、一貫して反対してきたのか

教皇庁の最新の言明

カトリック教会が奴隷貿易に関してどのような態度を取ってきたかについて、「教皇庁正義と平和評議会」が最近公表した指針『教会と人種主義』（1988）には、次のように記されています

「...たとえ、その動機が、主として安値な労働力を手に入れるためであったにしろ、何十万もの人によって買い取られ、アメリカまで連れて来られたアフリカの黒人奴隷の売買について...彼らが捕えられた状況や、交通路の状況があまりにもひどいので、新世界に到着する前、また出発する前でさえ、数多くの者が死亡しました。新世界では、奴隷としてもっともいやしい仕

事につくことが運命づけられていました。

この奴隷貿易は、1562年に始められたのですが、奴隷制は、結果としてほぼ三世紀も続くことになったのです。ここで再び繰り返しますが、歴代の諸教皇や神学者、また多くの人道主義者たちは、こうした慣行に反対して立ち上がりました。教皇レオ十三世は、1888年5月5日付けの回勅「奴隷制度廃止について」(In plurimis)において、奴隷制を断固として非難し、また奴隷制を撤廃したブラジルをたたえています。本文書の公刊は、この記念すべき回勅の百周年と一致しています。教皇ヨハネ・パウロ二世は、ヤウンデに参集したアフリカの知識人たちを前にした演説(1985年8月13日)で、キリスト教国に属する人々が、かつて黒人奴隷売買に関係していた事実、何らためらうことなく遺憾の意を表明したのです。」

カトリック教会は奴隷貿易について、一貫して断固反対してきた、と主張するこの言明は、『新カトリック百科辞典 New Catholic Encyclopedia』などに見る従来の見解と、ほぼ、同一です。

教皇庁の言明についての第一印象

教皇庁の公式言明についての筆者の第一印象は、「首を傾げ^{かし}たくなるものばかり」というものです。「単なる商行為」であったかのような、また、「意図しない結果」でしかなかったかのような記述は論外とします。しかし、「奴隷貿易は1562年に始まった」というのは事実と反しますし、また「歴代の教皇...が一貫して断固反対して立ち上った」のなら、なぜ何世紀も続くことになったのか理解できません。しかも、唯一明記されているブラジルを称える教皇レオ十三世の回勅は、デンマーク、英国等が法的廃絶を決めてから数十年を経たものですし、それに何世紀も先立つ回勅、特に、奴隷化を容認する文書についてはおくびにも出していません。

なぜこのような歪曲無視がなされるのか、詳しくは次回以降の課題です。ただここでは、「キリスト教国に属する人々が、かつて黒人奴隷売買に関係していた事実、何らためらうことなく、遺憾の意を表明された(教皇の行為^{わざ})」が、誠実であるかどうかの条件についてだけ記しておこうと思います。



ゴレ島 “不帰の旅” への最後の港

教皇ヨハネ・パウロ二世のゴレ島での「遺憾の意」の表明を理解するために、この島の生い立ちを、まず、説明します。

筆者も「第二回アフリカ平和巡礼」(1997年9月29日 - 12月27日)の起点としたゴレ島は、ダカール港外3キロに位置する東西300メートル、南北900メートルの小島です。老若男女の海水浴客、観光客が戯れるこの島は、今ではユネスコの世界文化遺産に登録されていますが、それはこの島が“奴隷たち”の“不帰の旅”への最後の港だったからに他なりません。

最初にこの島に到達したのはポルトガル人で、16世紀末にはオランダが要塞を造り、1677年にはフランスがこれを奪って、交易基地にしました。それとともにゴレ島は、フランスがセネガル沿岸部で行なった奴隷貿易の拠点として、奴隷を集荷し一時的に収容する基地になっていきました。毎年、数百人、多い時には千人を超す奴隷が収容されていたと言われます。

「奴隷の家」と「故郷最後の時」

ゴレ島にシニャール(現地人女性とヨーロッパ男性との間に生まれた裕福な女性)のために1776年に建てられた家が、「奴隷の家 la maison des esclaves」として保存公開されています。赤褐色の二階建てで、正面には馬蹄形の階段を構える、決して上品とは言えない外観ですが、管理者のJ・ヌジャイ氏(75才)の説明によると、窓のほとんどない小部屋ばかりの一階には奴隷たちが詰め込まれ、二階は奴隷商人である主人とその手下らの住いでした。海に面した一階中央には人ひとりが通れる間口が開いていますが、それは乗船口だったとも、こと切れるかこと切れそうになった犠牲者を海上投棄するためだったとも言われています。



「奴隷の家」に足を踏み入れるとき、暗闇で鎖に繋がれた無数の犠牲者に想いを馳せずにはいられません。彼らを待つのは遠路の危険、終生中断されることのない強制労働だったことは言うまでもありませんが、とりわけ断腸の思いだったのは、「これが故郷最後の時」と自覚することではなかったのでしょうか。故郷を離れ、親兄弟とも別れ、どこへ連行されるのかさえ判らないのであれば、自ら生命を断つ思いに駆られるのも当然なこと、...そして到着した未開の地では、言葉も分からず、文化も気候風土も別物である上に、夫婦でさえチリチリに売られていって、再び会うことさえ叶わないのであれば、...身に受けた焼印も、心に刻まれた傷痕も、ともに、人間の尊厳を根底から抹殺するものであったに違いありません。

教皇ヨハネ・パウロ二世の“遺憾の意”の表明

そのゴレ島に、その「奴隷の家」に、教皇ヨハネ・パウロ二世が、1992年2月22日、訪問されました。「奴隷貿易に従事したキリスト教国家とキリスト教徒に神の許しを乞うために」。

新聞は、これは「歴史上かつてなかった出来事」と報じました。教皇の“遺憾の意”の表明は「これは、キリスト教と称される文明のもたらした最も不正で悲しむべきドラマであり、何世紀にも何世代にもわたる(犠牲者の)叫びが、このドラマが罪に根ざしていることを明示している⁽⁶⁾」というものでした。

“遺憾の意”の表明をどのように理解すればよいのか

“遺憾の意”の表明に接すれば、それをどのように理解するかの問題を避けて通ることはできません。或いは、人類の罪過を一身に引き受け贖罪に励む「よき牧者」の実践、少なくとも、“現代キリスト教の良心の発露”とも受け取られるかも知れません。それは、奴隷貿易が「キリスト教国とそれに属する人々(だけ)によってなされた罪過」なのか、それとも同時に、「キリストの御名を戴く教会も関与した罪過」なのか、にかかっており、これこそ本連載全体の主題です。



海水浴の地元民で賑わう
ゴレ島船着場周辺

もし前者だけであれば、“遺憾の意”の表明は「よき牧者」の良心と善意の単なる過剰表現かも知れませんが、後者であれば、この上なく不道德な責任転嫁でゾッとする事態となります。次に掲げるのが、なぜそうなるのかの基準です⁽⁷⁾

第一基準 もし奴隷貿易が、「教会の子ら」(だけ)の私的罪過の一つであれば、教会の責任者に直接の責任はなく、謝罪は不要です。例えば、アメリカ大統領は、同国軍人の公務中に犯す罪過については責任がありますが、私的罪過については責任がないのと同様です。

第二基準 もし奴隷貿易の発生と継続に教会が関与していたのであれば、教会には罪過があり、謝罪の義務があります。そして、教会に責任があるにもかかわらず、それをキリスト教国とキリスト教徒との責任とし、彼らに代わって謝罪するならば、それは自他を共に欺く不道德であって、誠実を旨とするはずのキリストの教会とも、信仰者の態度とも、まったく無縁の破廉恥となります。

次回以降の予定

以上が、「課題のありか」の大要ですが、終わりに次回からの展開予定を記します

第2回目 カトリック教会は奴隷貿易を容認したのではないのか

教皇文書と新大陸での実態の吟味

第3回目 「三角貿易」が近代資本主義を形成したのではないのか

奴隷貿易の実態と先行条件期の検討

第4回目 「売るから買うのか、買うから売ることか」

天正遣欧使節の見た日本人奴隷、等について

第5回目 人間性を語って止まなかったヨーロッパ・キリスト教と解放の神学、等

第6回目 「見捨てられた大陸」の現状と「ダーバン反差別会議」等

【註】

- (1) E・ウィリアムズ(1970)『コロンブスからカストロまで カリブ海域史、1492 - 1969』岩波書店、2000。W・ロドネー『世界資本主義とアフリカ』拓殖書房、1978。E.D.Genovese, *The World the Shareholders Made*, Wesleyan University Press, 1969 ; A.G.Frank, *World Accumulation, 1492-1789*, Monthly Review Press, 1978 ; W.W.Rostow, *The Stages of Economic Growth : A Non-Communist Manifesto*, 1960, 『経済成長の諸段階』ダイヤモンド社、1965。
- (2) 清水正義「『人道に対する罪』の成立」、内海愛子・高橋哲哉編『戦争裁判と性暴力』第 巻、緑風出版、2000、20-37。藤田久一『戦争犯罪とは何か』岩波書店、1995。
- (3) それにもかかわらず 2003 年 7 月 8 日、アフリカ 5 カ国訪問の途次、ゴレ島を訪れた G・ブッシュ大統領は「これは歴史上最大の犯罪の一つだ」と厳粛に語った。
“President Bush Speaks at Goree Island in Senegal.”
<http://www.whitehouse.gov/news/releases-1.html>.
- (4) 武者小路公秀「『同時多発テロ』とグローバル闘争」、アジア太平洋資料センター編『これは新たな戦争か?』2001.10、50-57、50 頁。
上村英明「ダーバンへの長い道のり、そして、差別撤廃への未来への視座」『反人種主義・差別撤廃世界会議と日本』『部落解放』502 増刊号、2002 年 5 月、33-72、33 頁。
- (5) 現教皇による、アフリカでの“遺憾の意”の表明は三度認められる。前記ヤウンデの他に、セネガルはゴレ島(1992 年 2 月 22 日)でと、サントメ・プリンシペ(1992 年 6 月 6 日)でのものである。
- (6) 括弧内は全部、“At Goree, pope asks God’s forgiveness for evil of slavery.”
National Catholic Reporter, March 13, 1992, p.21.
- (7) 西山俊彦「教会は誠実に罪の赦しを願ったのか」『記憶と和解』に関する高柳師の所論に関連して」『福音宣教』2001 年 3 月、32-39。